

加工・業務用野菜をめぐる状況


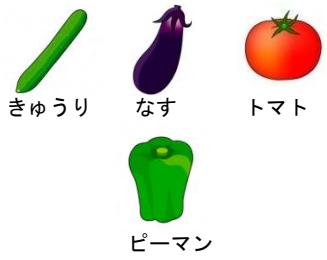
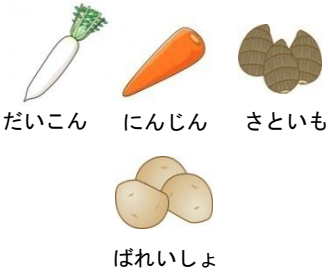
令和3年4月

農林水産省

I . はじめに

1. 野菜の品目

- 我が国では数多くの野菜が栽培されているが、生産量等が統計で把握されているのは約90品目。
- 全国的に流通し、特に消費量が多く重要な野菜を指定野菜として指定。

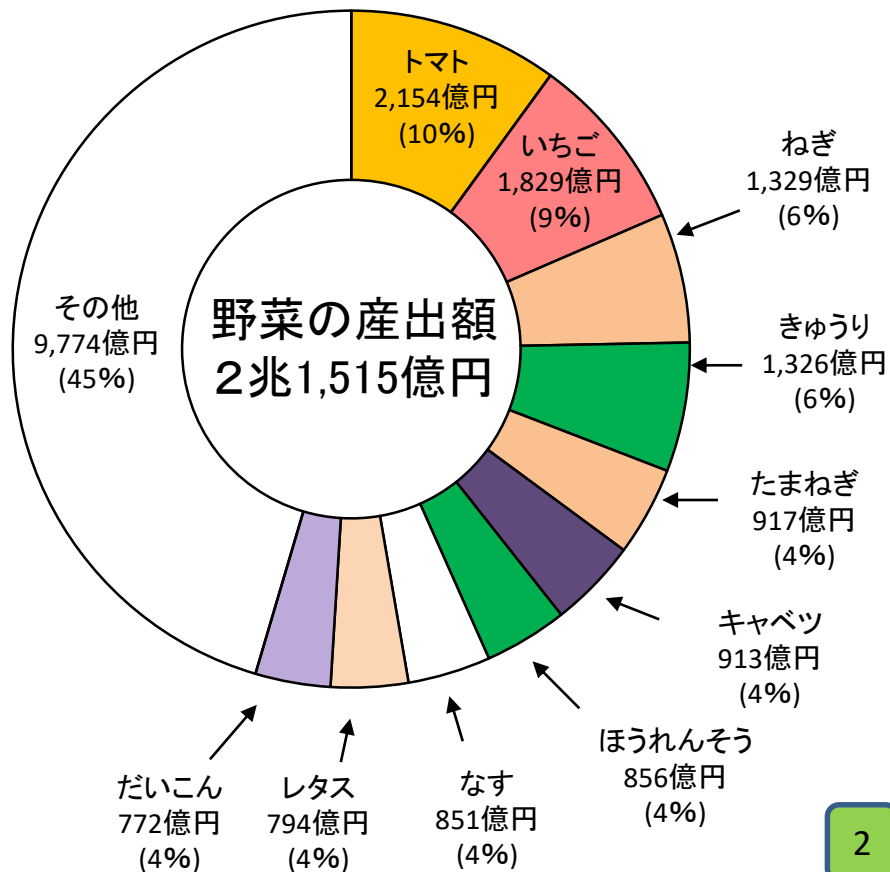
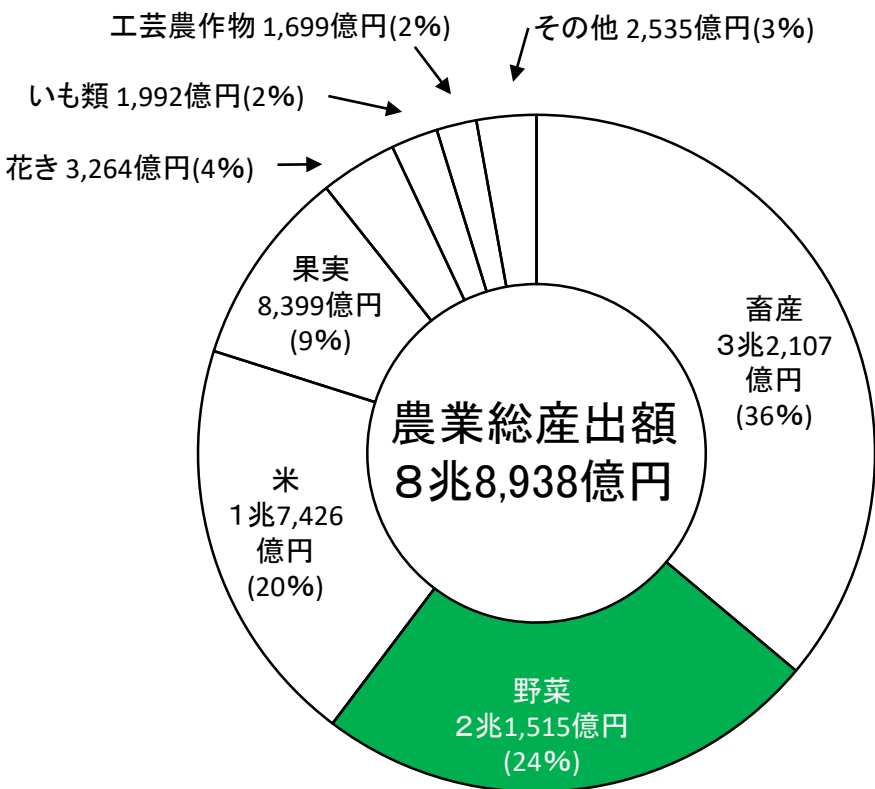
| | 葉茎菜類 | 果菜類 | 根菜類 | 果実的野菜 | その他野菜 | 出荷量 (30年産) |
|------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------|------------|-----------------|
| 指定野菜 (14品目) 全国的に流通し、特に消費量が多く重要な野菜 |  キャベツ ほうれんそう レタス ねぎ たまねぎ はくさい |  きゅうり なす トマト ピーマン |  だいこん にんじん さといも ばれいしょ | | | 929万 t (78%) |
| 特定野菜 (35品目) 地域農業振興上の重要性等から指定野菜に準ずる重要な野菜 | こまつな、みつば、ちんげんさい、ふき、しゅんぎく、セルリー、アスパラガス、にら、カリフラワー、にんにく、ブロッコリー、わけぎ、らっきょう、みずな、みょうが | かぼちゃ、さやいんげん、スイートコーン、そらまめ、えだまめ、さやえんどう、グリーンピース、にがうり、ししとうがらし、オクラ | かぶ、ごぼう、れんこん、やまのいも、かんしょ | いちご、メロン、すいか | しょうが、生しいたけ | 202万 t (17%) |
| その他特産野菜 (36品目) | うど、芽キャベツ、モロヘイヤ、もやし等 | とうがらし、とうがん等 | くわい等 | | マッシュルーム | 65万 t (5%) |

2. 野菜の産出額

- 野菜の産出額は2兆1,515億円で、我が国の農業総産出額の2割程度。
- トマト、いちご、ねぎ等の主要10品目で野菜の産出額全体の6割程度。

○ 我が国の農業総産出額(令和元年)

○ 野菜の産出額の品目別割合(令和元年)



3. 野菜の都道府県別産出額(令和元年)

(単位:億円)

| 都道府県 | 産出額 | 順位 | 都道府県 | 産出額 | 順位 | 都道府県 | 産出額 | 順位 |
|------|-----------|----|------|-----------|----|------|-----------|----|
| 北海道 | 1,951(9%) | 1 | 石川 | 97 | 44 | 岡山 | 205 | 33 |
| 青森 | 642 | 13 | 福井 | 81 | 46 | 広島 | 236 | 31 |
| 岩手 | 259 | 28 | 山梨 | 110 | 41 | 山口 | 148 | 35 |
| 宮城 | 265 | 27 | 長野 | 818 | 7 | 徳島 | 349 | 19 |
| 秋田 | 281 | 26 | 岐阜 | 323 | 23 | 香川 | 242 | 30 |
| 山形 | 460 | 16 | 静岡 | 607 | 14 | 愛媛 | 190 | 34 |
| 福島 | 438 | 18 | 愛知 | 1,010(5%) | 5 | 高知 | 715 | 10 |
| 茨城 | 1,575(7%) | 2 | 三重 | 139 | 38 | 福岡 | 702 | 11 |
| 栃木 | 784 | 9 | 滋賀 | 106 | 42 | 佐賀 | 335 | 21 |
| 群馬 | 912 | 6 | 京都 | 248 | 29 | 長崎 | 453 | 17 |
| 埼玉 | 796 | 8 | 大阪 | 136 | 39 | 熊本 | 1,220(6%) | 4 |
| 千葉 | 1,305(6%) | 3 | 兵庫 | 348 | 20 | 大分 | 309 | 25 |
| 東京 | 121 | 40 | 奈良 | 104 | 43 | 宮崎 | 661 | 12 |
| 神奈川 | 333 | 22 | 和歌山 | 144 | 37 | 鹿児島 | 532 | 15 |
| 新潟 | 317 | 24 | 鳥取 | 213 | 32 | 沖縄 | 146 | 36 |
| 富山 | 56 | 47 | 島根 | 94 | 45 | 合計 | 21,515 | - |

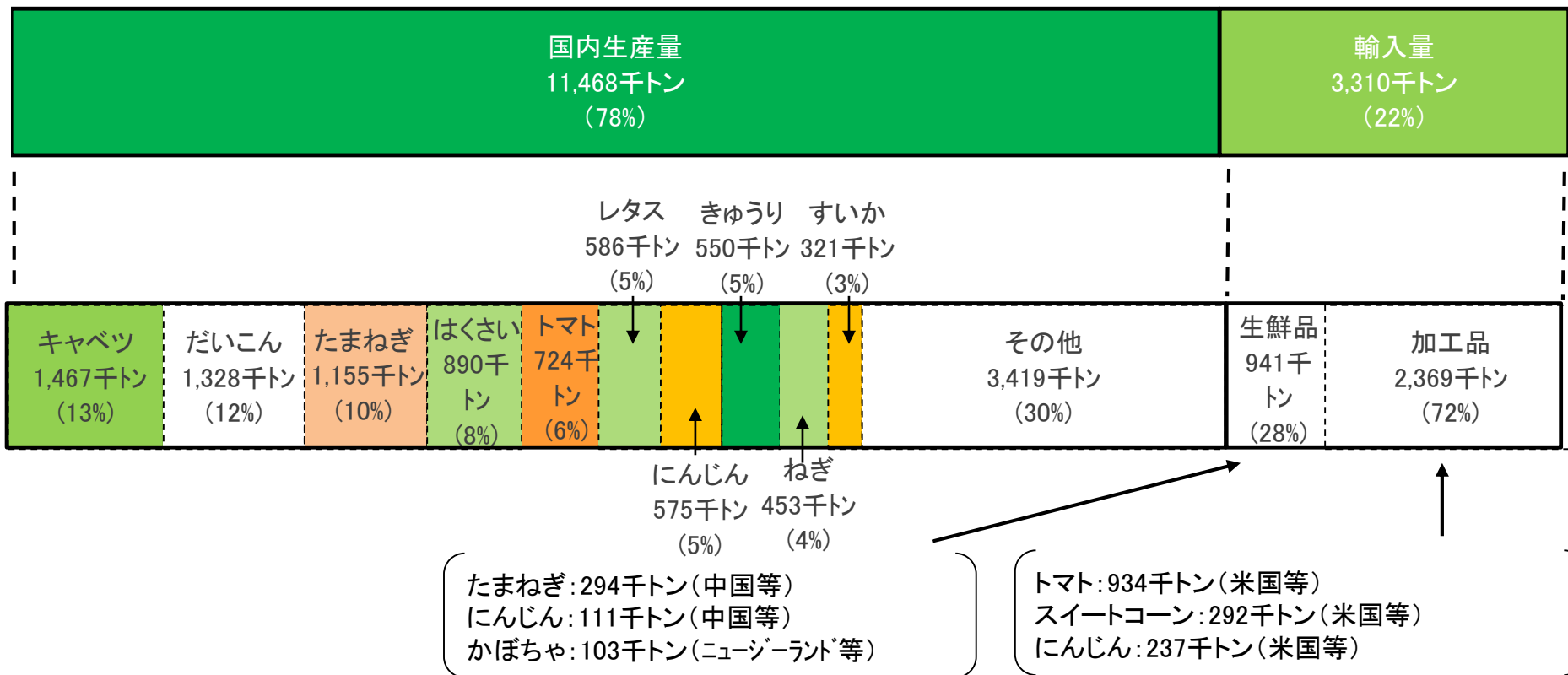
資料:農林水産省「生産農業所得統計」

注:()内は野菜の産出額の合計に占める割合。

4. 野菜の国内生産量及び輸入量

- 野菜の需給構造のうち、国内生産量は8割で、輸入量は2割である。
- 国内で生産されている主な品目は、キャベツ、だいこん及びたまねぎである。
- 輸入量のうち生鮮品では、たまねぎが全体の3割強(うち9割が中国産)を占め、加工品ではトマトが全体の4割(うち2割がアメリカ産)を占める。

○ 野菜の需給構造(平成30年)



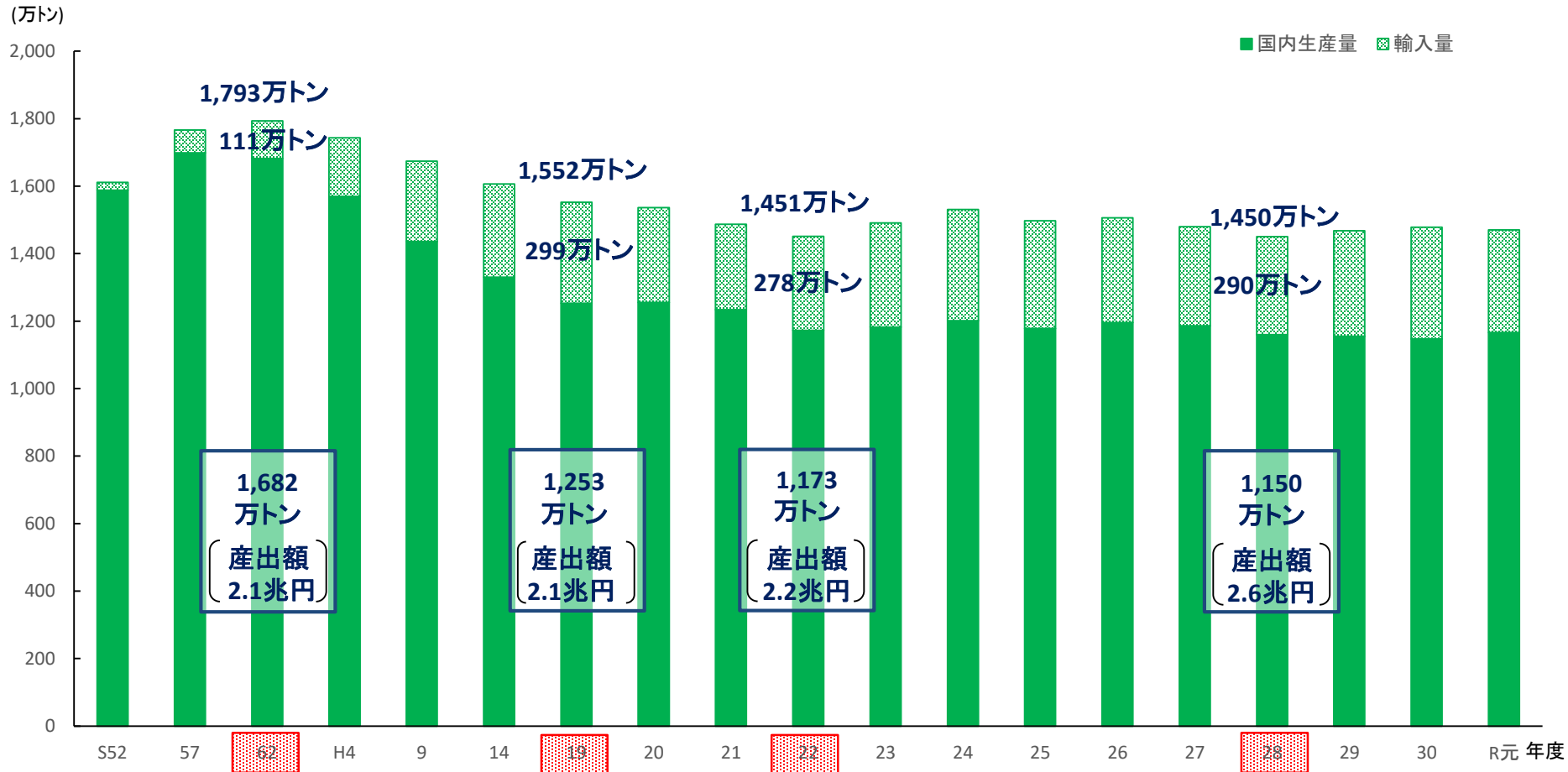
資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」、「地域特産野菜生産状況調査」、「特用林産物生産統計調査」、財務省「貿易統計」

注:貿易統計の輸入量のうち加工品については、生鮮品に換算している。また、グラフ中の数値について、四捨五入により合計と内訳の計が一致しない場合がある。

5. 野菜の国内生産量及び輸入量の推移

- 近年の野菜の供給量は、国産生産量及び輸入量を合わせて約1,500万トンで推移。
- このうち、国内生産量は約1,200万トン(約8割)、輸入量は約300万トン(約2割)。

○ 野菜の国内生産量及び輸入量の推移



資料:食料需給表

注:輸入量には加工品が含まれており、生鮮に換算している。

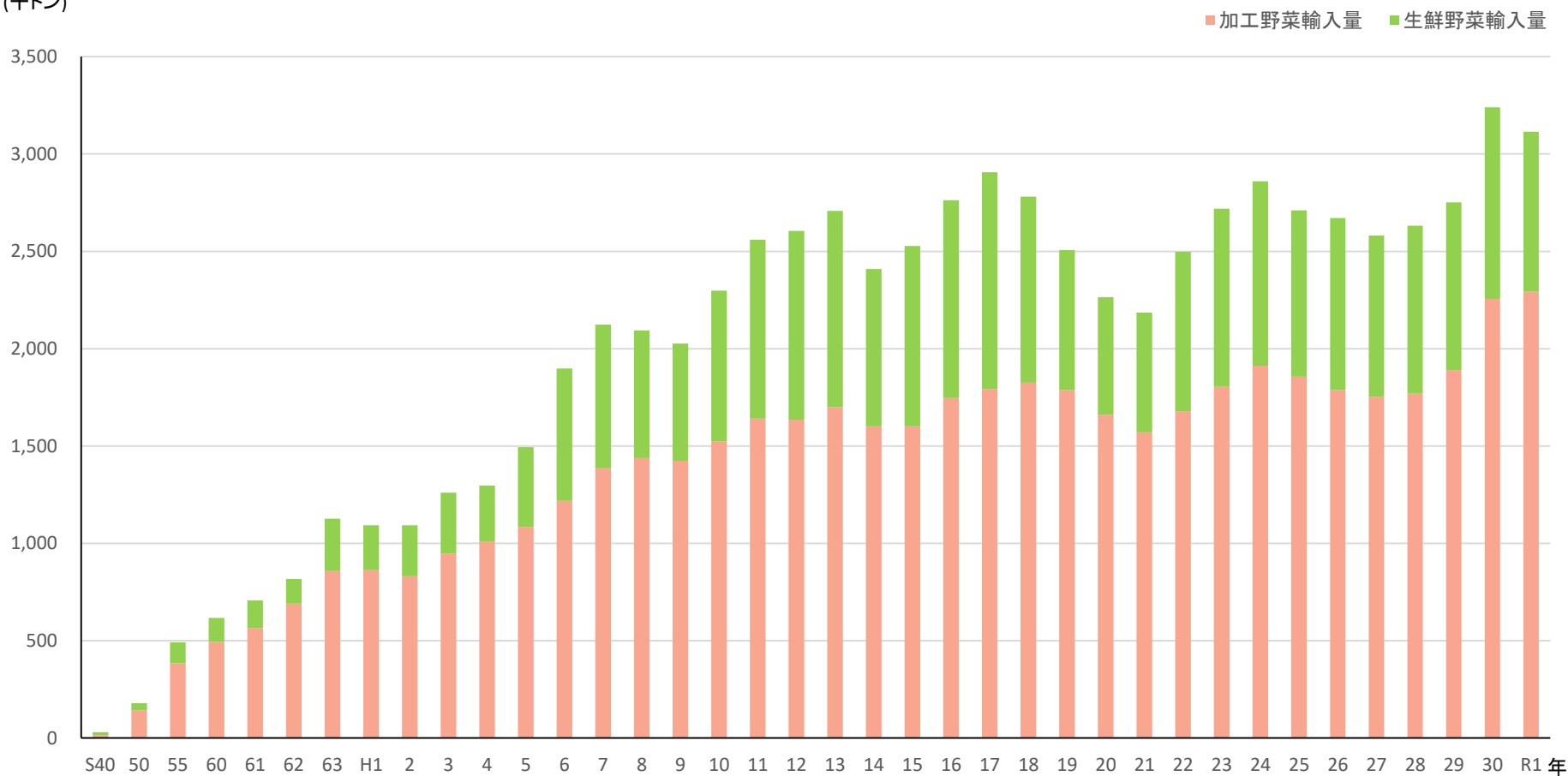
Ⅱ．野菜の輸入動向

1. 野菜の輸入量の推移

- ライフスタイルが変化していく中、円高やデフレの影響も受けて昭和50年代以降野菜の輸入量が加工品を中心に大きく増加。
- 近年は全体で約300万トンで推移。

○ 野菜の輸入量の推移

(千トン)



資料:財務省「貿易統計」

2. 野菜の輸入動向

- 生鮮野菜の輸入量の上位品目はたまねぎ、かぼちゃ、にんじんで、中国からの輸入が多い。
- 加工品についても、トマトを除けば中国からの輸入が多くなっている。

○ 主要生鮮野菜の輸入先国・地域(令和2年)

| 品目 | 輸入量 (トン) | 第1位 | シェア (%) | 第2位 | シェア (%) | 第3位 | シェア (%) | トップ3の シェア計 (%) |
|------|-------------|-----|------------|---------|------------|-----|------------|----------------------|
| たまねぎ | 219,961 | 中国 | 96 | NZ | 3 | 米国 | 1 | 99 |
| かぼちゃ | 91,410 | NZ | 64 | メキシコ | 32 | 韓国 | 2 | 98 |
| にんじん | 84,449 | 中国 | 96 | オーストラリア | 2 | 台湾 | 1 | 99 |
| ねぎ | 52,769 | 中国 | 100 | ベトナム | 0 | — | — | 100 |
| ごぼう | 40,504 | 中国 | 99 | 台湾 | 1 | — | — | 100 |

資料:財務省「貿易統計」

○ 主要野菜加工品の輸入先国・地域(令和2年)

| 品目 | 輸入量 (トン) | 第1位 | シェア (%) | 第2位 | シェア (%) | 第3位 | シェア (%) | トップ3の シェア計 (%) |
|--------------|-------------|-----|------------|-------|------------|-------|------------|----------------------|
| トマトピューレ・ペースト | 144,164 | EU | 42 | 米国 | 25 | チリ | 13 | 81 |
| トマトケチャップ | 6,456 | EU | 48 | 米国 | 29 | メキシコ | 16 | 92 |
| トマトジュース | 4,901 | トルコ | 74 | 米国 | 16 | EU | 8 | 99 |
| きゅうり(塩蔵) | 16,756 | 中国 | 86 | ベトナム | 6 | インド | 6 | 97 |
| 冷凍えだまめ | 71,122 | 台湾 | 44 | タイ | 28 | 中国 | 23 | 96 |
| 冷凍スイートコーン | 48,933 | 米国 | 61 | タイ | 17 | 中国 | 9 | 87 |
| 冷凍ブロッコリー | 58,619 | 中国 | 49 | エクアドル | 47 | グアテマラ | 2 | 97 |
| 冷凍ほうれんそう | 48,053 | 中国 | 93 | EU | 2 | 台湾 | 2 | 97 |

資料:財務省「貿易統計」

Ⅲ. 野菜の消費動向

1. 加工・業務用野菜をめぐる社会構造等の変化

- 家庭内調理向けが主体であった野菜需要は、昭和50年代以降、社会構造・消費構造の変化に伴って加工・業務用向けの需要が拡大してきた。
- 今後も、食の外部化や簡便化の傾向は続くと考えられる中、加工・業務用需要へのシフトが進展すると見込まれる。

昭和50年代
～昭和年60年代



- 外食のチェーン化の進展など、大量・計画仕入れが前提の業務用需要が増大
- 加工用野菜は漬物中心

平成元年
～平成10年代



- ライフスタイルの変化や高齢化の進展に伴って、食の外部化が進行
- 外食市場が拡大するとともに、中国産を中心として加工向けの輸入野菜が増大

平成20年代
～現在



- 世帯構成の変化や女性の労働参加の高まりなどにより、食の簡便化・多様化が進展
- 中食市場が急拡大したほか、カット野菜やキット野菜のニーズが拡大

今後

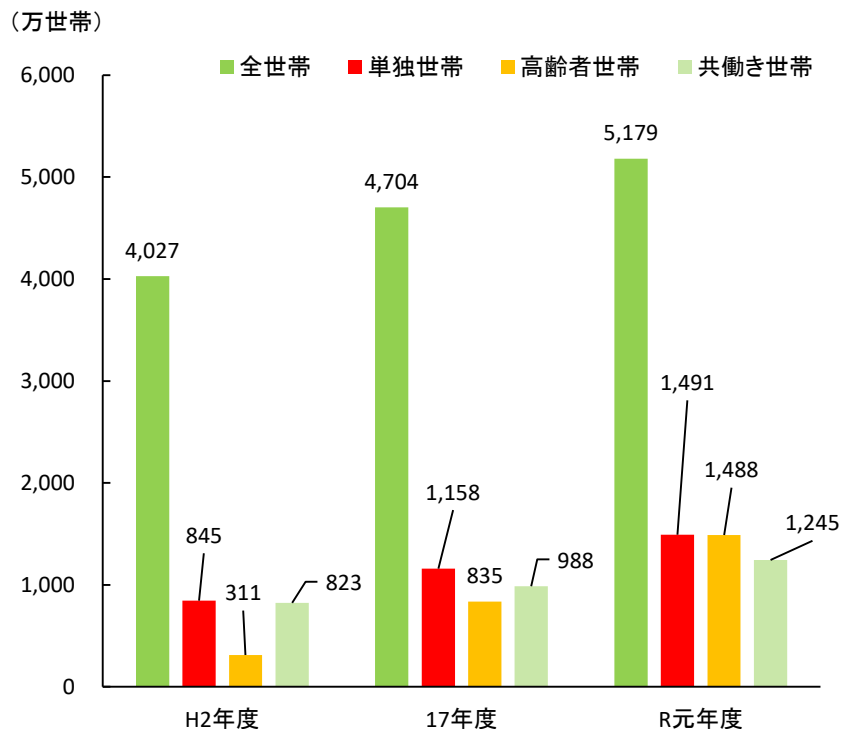


- 単独世帯数や女性の就業率は増加傾向
- 食の外部化や簡便化が求められる社会情勢は今後も続くものと見込まれる

2. 野菜の消費動向(社会構造の変化)

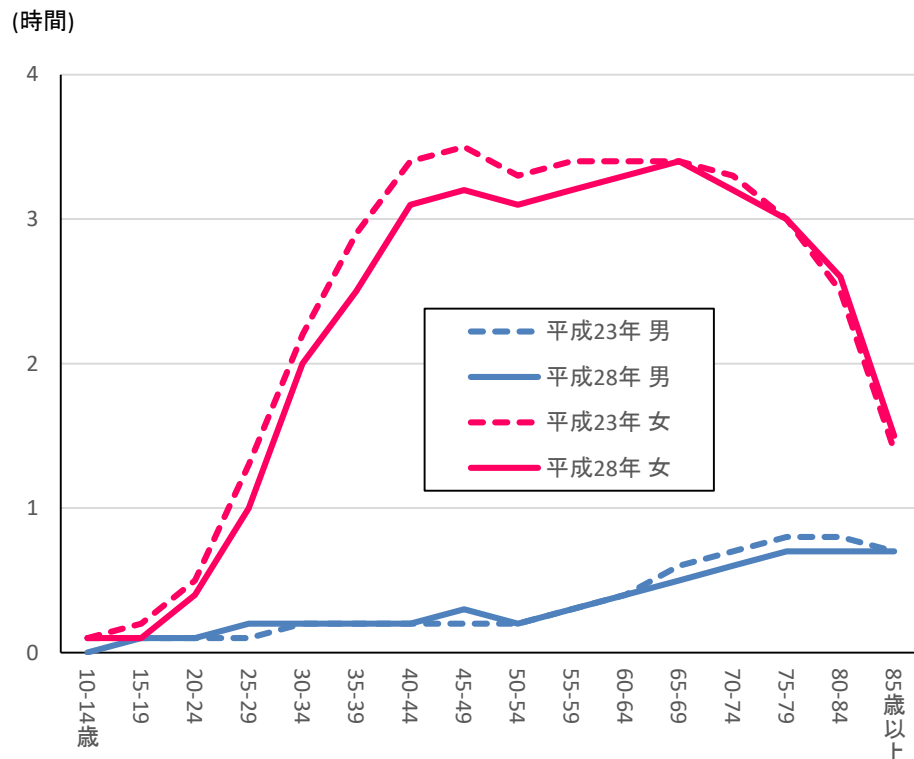
- 高齢化の進展や女性の労働参加の高まりにより、大家族世帯が減少し、単独世帯や共働き世帯が増加。
- また、女性が家事に充てる時間も減少傾向にある。

○ 世帯構成の変化



資料: 単独世帯及び高齢世帯は厚生労働省「国民生活基礎調査」、共働き世帯は内閣府「男女共同参画白書」

○ 男女、年齢階級別家事時間 (平成23年、28年・週全体)

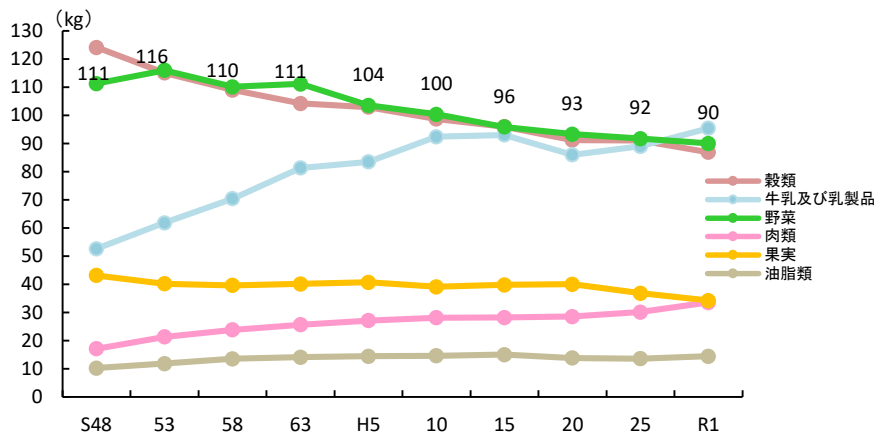


資料: 総務省「平成28年社会生活基本調査」

3. 野菜の消費動向(摂取量等)

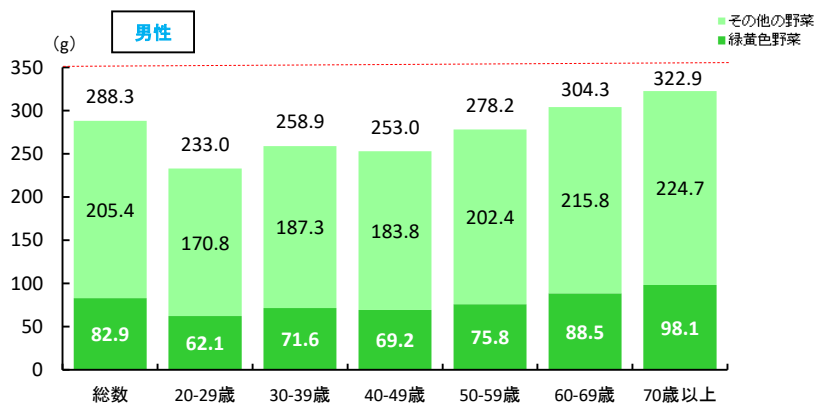
- 主要農産物の消費動向をみると、野菜の消費は減少傾向で推移。
- 健康づくりの指標「健康日本21」における成人1人1日当たりの野菜摂取目標量350gに対し、摂取量の現状は280g程度で約7割の成人が目標に達しておらず、特に20～40歳代で不足が目立っている。

○ 主要農産物の1人1年当たり消費動向



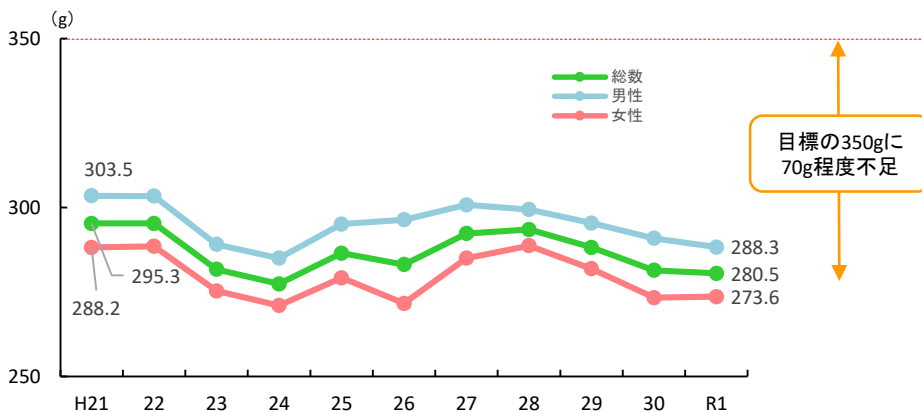
資料：農林水産省「食料需給表」
注：データは供給数量(=消費者等に到達した食料)であり、実際に摂取された食料の数量ではない。

○ 男女世代別の1人1日当たり野菜摂取量

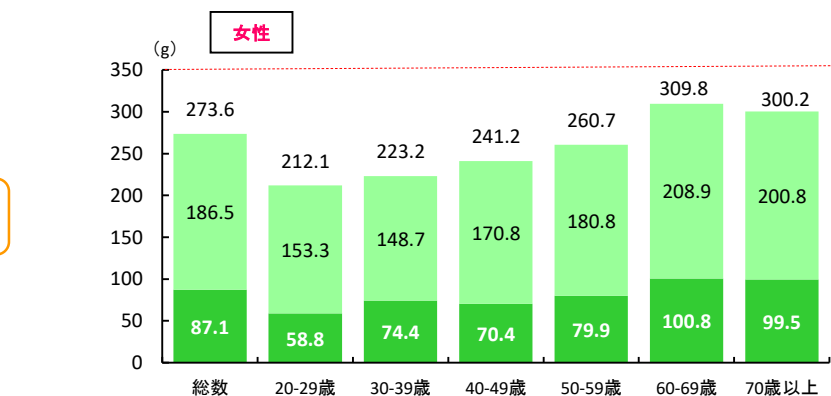


| 野菜の摂取量が350g以上の者の割合(%) | 総数 | 20-29歳 | 30-39歳 | 40-49歳 | 50-59歳 | 60-69歳 | 70歳以上 |
|-----------------------|------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| | 30.1 | 19.7 | 21.9 | 24.2 | 28.3 | 33.3 | 36.9 |

○ 1人1日当たり野菜摂取量の推移



資料：厚生労働省「国民健康・栄養調査」
注：データは野菜類であり、緑黄色野菜、その他の野菜、野菜ジュース、漬け物



| 野菜の摂取量が350g以上の者の割合(%) | 総数 | 20-29歳 | 30-39歳 | 40-49歳 | 50-59歳 | 60-69歳 | 70歳以上 |
|-----------------------|------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| | 26.5 | 14.8 | 14.8 | 19.4 | 24.0 | 35.7 | 31.1 |

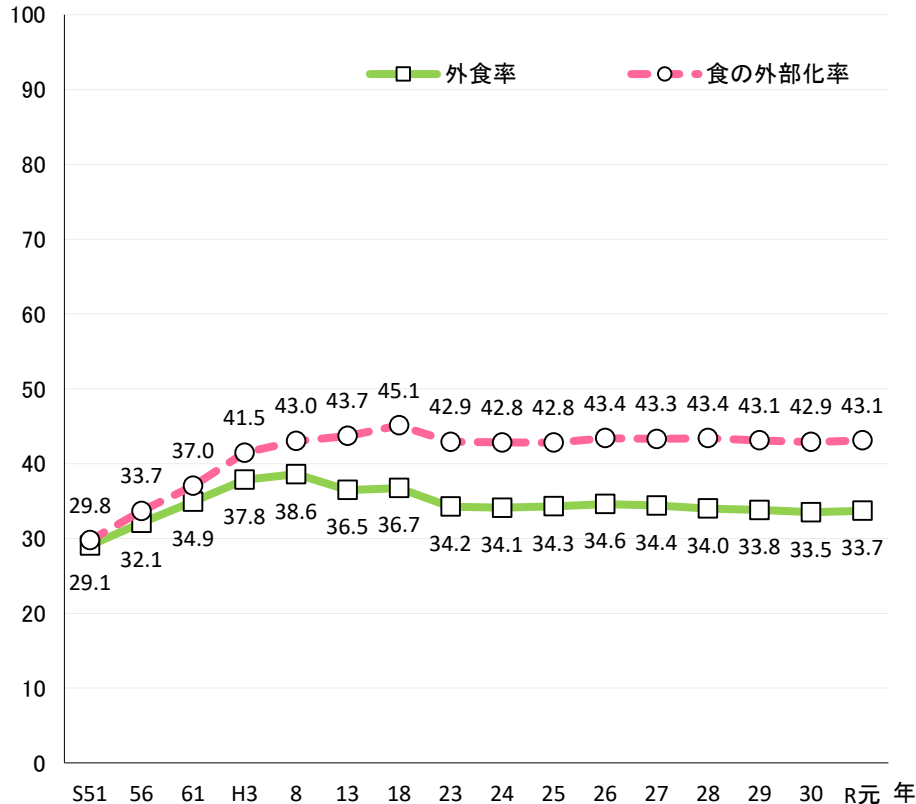
資料：厚生労働省「国民健康・栄養調査」(令和元年)
注：データは野菜類であり、緑黄色野菜、その他の野菜、野菜ジュース、漬け物

4. 野菜の消費動向(外食及び調理食品の動向)

- ライフスタイルの変化に伴って平成初期までにかけて外食需要が急拡大。
- 外食の1人当たり支出金額は近年横ばいとなっていたが、R2年は新型コロナの影響により、急激に減少。一方、調理食品の1人当たり支出金額は一貫して増加傾向。

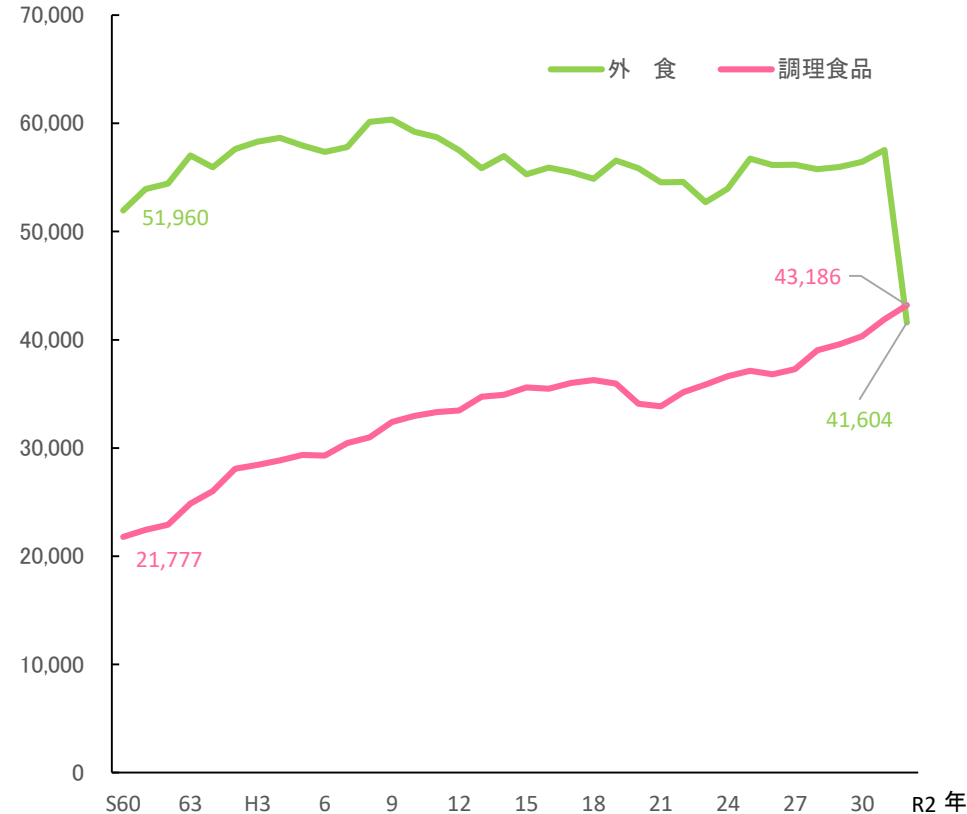
○ 国民の食生活に占める外食率及び外部化率の推移

(%)



○ 外食及び調理食品1人当たり支出金額の推移

(円)



資料: (公財)食の安全・安心財団による推計

注1: 外食率=外食市場規模/(家計の食料・飲料支出額+外食市場規模)

注2: 食の外部化率=(外食市場規模+料理品小売市場規模)/(家計の食料・飲料支出額+外食市場)

資料: 総務省「家計調査」

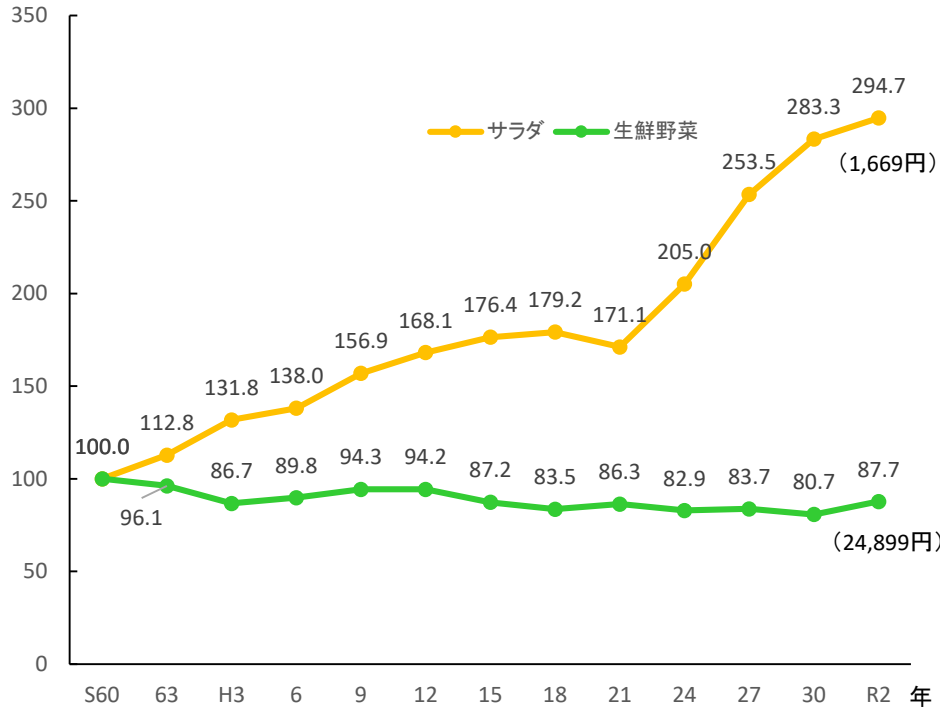
注: 「二人以上の世帯」の1世帯当たりの支出金額を消費者物価指数(平成27年=100)及び世帯人員で除して算出

5. 野菜の消費動向(中食の動向)

- 家庭での生鮮野菜の消費量が減少する一方、スーパー、コンビニ、デパ地下等でのサラダをはじめとした加工調理品の消費が増加し、野菜を使った料理の内容が変化している。
- また、現在では外食の増加傾向と同様に、コンビニやスーパーを中心に中食の市場規模も増加し、平成29年には10兆円を突破。

○ 生鮮野菜及びサラダの1人当たり購入金額の推移

(%) (※昭和60年=100とした場合)



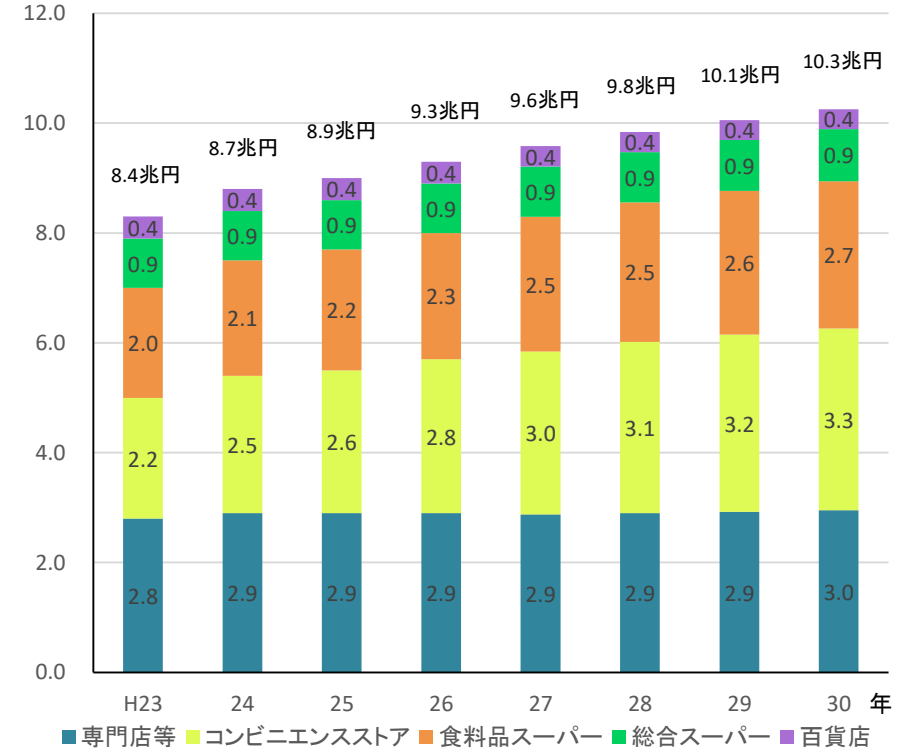
資料:総務省「家計調査」

注1:2人以上の世帯

注2:1人当たりの支出金額は、1世帯当たりの支出金額を消費者物価指数(平成27年=100)で除し、世帯員数で除して算出

○ 業態別の中食市場規模の推移

(兆円)



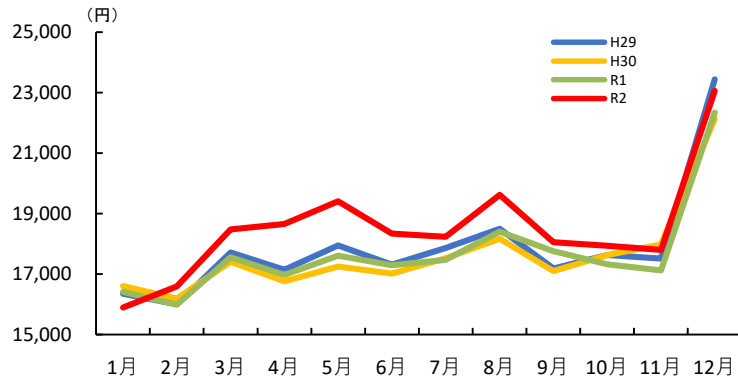
資料:(一社)日本惣菜協会「惣菜白書」(各年版)

注:「専門店等」は、惣菜専門店(路面店、テナントなど)、イートイン併設型惣菜店、受注後調理型惣菜店をいう。ただし、百貨店のテナント惣菜販売額は「百貨店」に含まれる。

6. 野菜の消費動向(新型コロナ禍の動向)

- 新型コロナ禍で食料消費は、外食等が大幅に減少する一方で、家庭内調理が大幅に増加。
- 野菜の購入額をみると、家庭内調理で使う生鮮野菜(カット野菜・食材キット含む)、冷凍野菜、野菜惣菜などの購入額が大幅に増加。

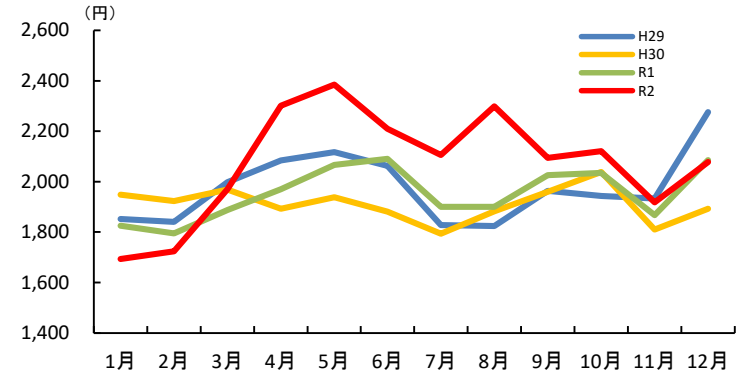
○ 家庭内調理の1人当たり支出金額



資料:総務省「家計調査」

注:家庭内調理とは、「食料」から「外食」及び「調理食品」を差し引いたもので、「二人以上の世帯」の1世帯当たりの支出金額を消費者物価指数(平成27年=100)及び世帯人員で除して算出

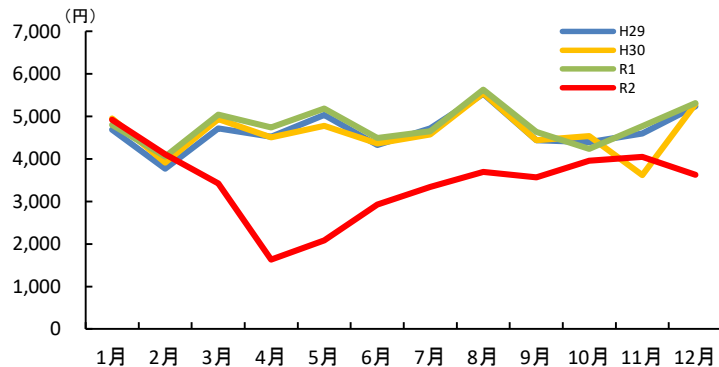
○ 家計における生鮮野菜の1人当たり支出金額



資料:総務省「家計調査」

注:「二人以上の世帯」の1世帯当たりの支出金額を消費者物価指数(平成27年=100)及び世帯人員で除して算出

○ 家計における外食の1人当たり支出金額

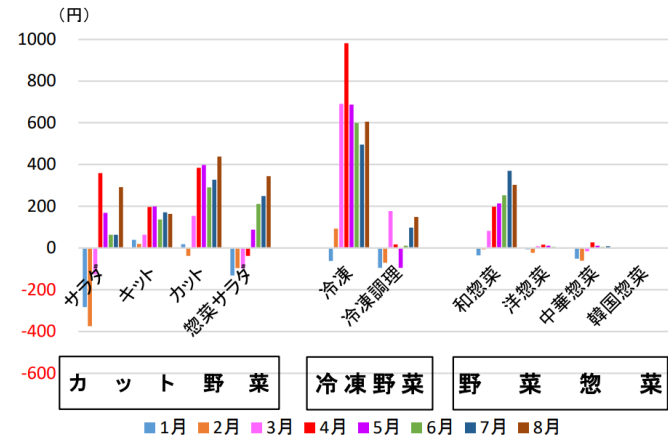


資料:総務省「家計調査」

注:「二人以上の世帯」の1世帯当たりの支出金額を消費者物価指数(平成27年=100)及び世帯人員で除して算出

○ カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜の購入動向

(※「令和2年の千人当たり販売金額」から「平成29～令和元年の3年平均の千人当たり販売金額」を差し引いた値で、増加していればプラス、減少していればマイナスとなる。)



資料:独立行政法人農畜産業振興機構「新型コロナウイルス禍における野菜消費の変化」

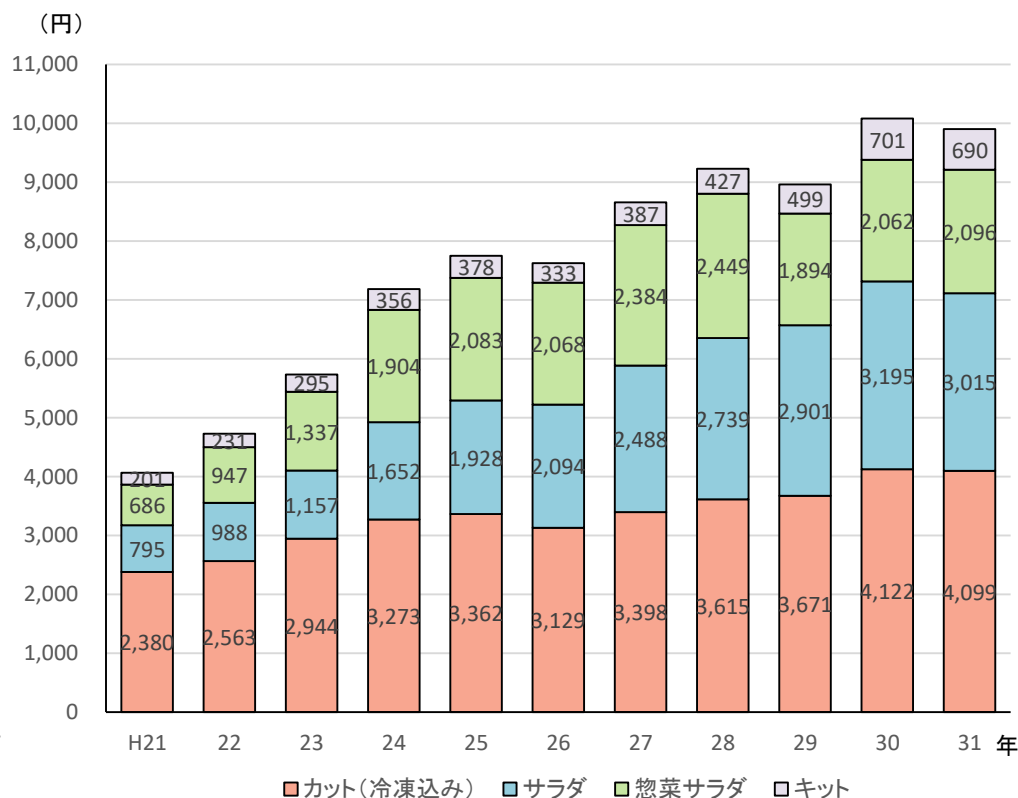
7. 野菜の消費動向(漬物及びカット野菜の動向)

- 従来野菜の加工品の主な品目の一つであった漬物は、米の消費量の減少等に伴って減少傾向。
- 他方、カット野菜やキット野菜は拡大傾向にある。

○ 野菜漬物の1人当たりの購入金額の変化



○ カット野菜の千人当たり販売金額の推移



資料:総務省「家計調査」

注:1. 2人以上の世帯

2. 1人当たりの支出金額は、1世帯当たりの支出金額を世帯員数で除して算出

3. 金額は、(総務省「消費者物価指数(平成27年基準)」のだいこん漬及びはくさい漬の指数に基づき換算

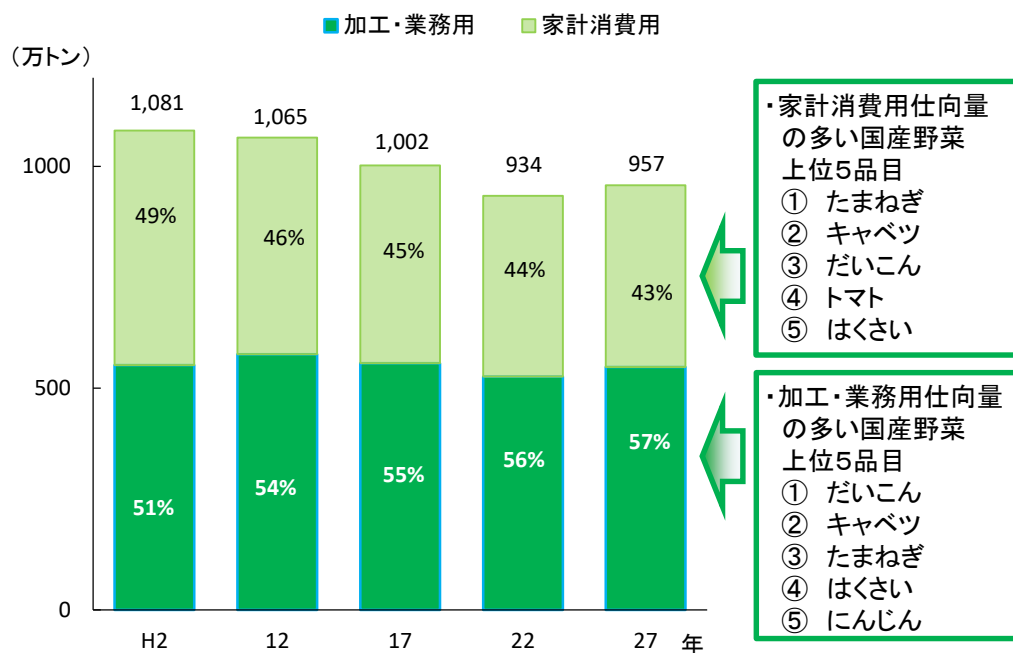
資料:農畜産業振興機構「新型コロナウイルス禍における野菜消費の変化」

(株)KSP-SP が収集している全国のスーパーマーケットのPOSデータをもとに作成。

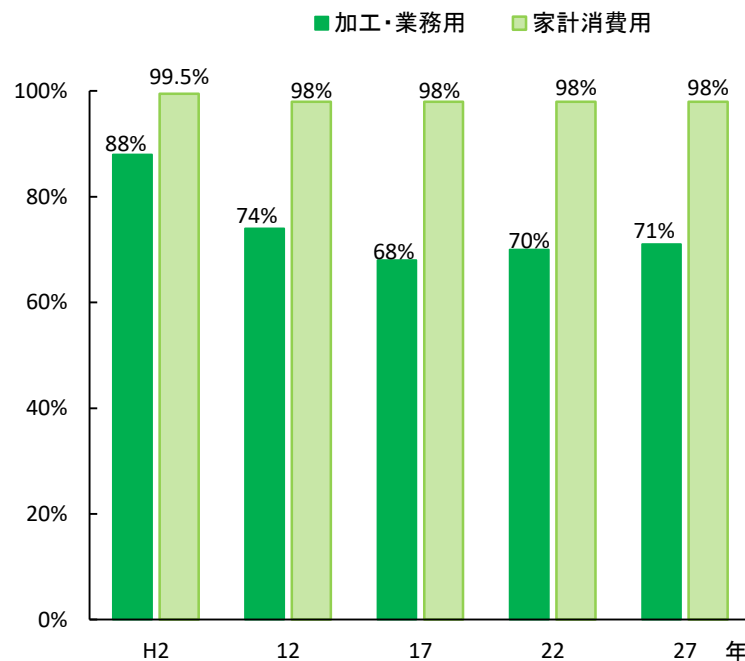
8. 野菜の用途別仕向け量の推移

- 食の外部化を背景に、野菜の需要は家計消費用から加工・業務用に徐々にシフトし、近年では加工・業務用が全体の約6割。
- 家計消費用はほぼ全量が国産だが、加工・業務用は、大ロットで定時・定量・定価格の供給に対応できた輸入野菜が円高の影響も受けて増加したことにより、現在の国産割合は7割程度で推移。

○ 加工・業務用及び家計消費用の国内仕向け量(主要品目)



○ 加工・業務用野菜の国産割合(主要品目)



資料: 農林水産政策研究所

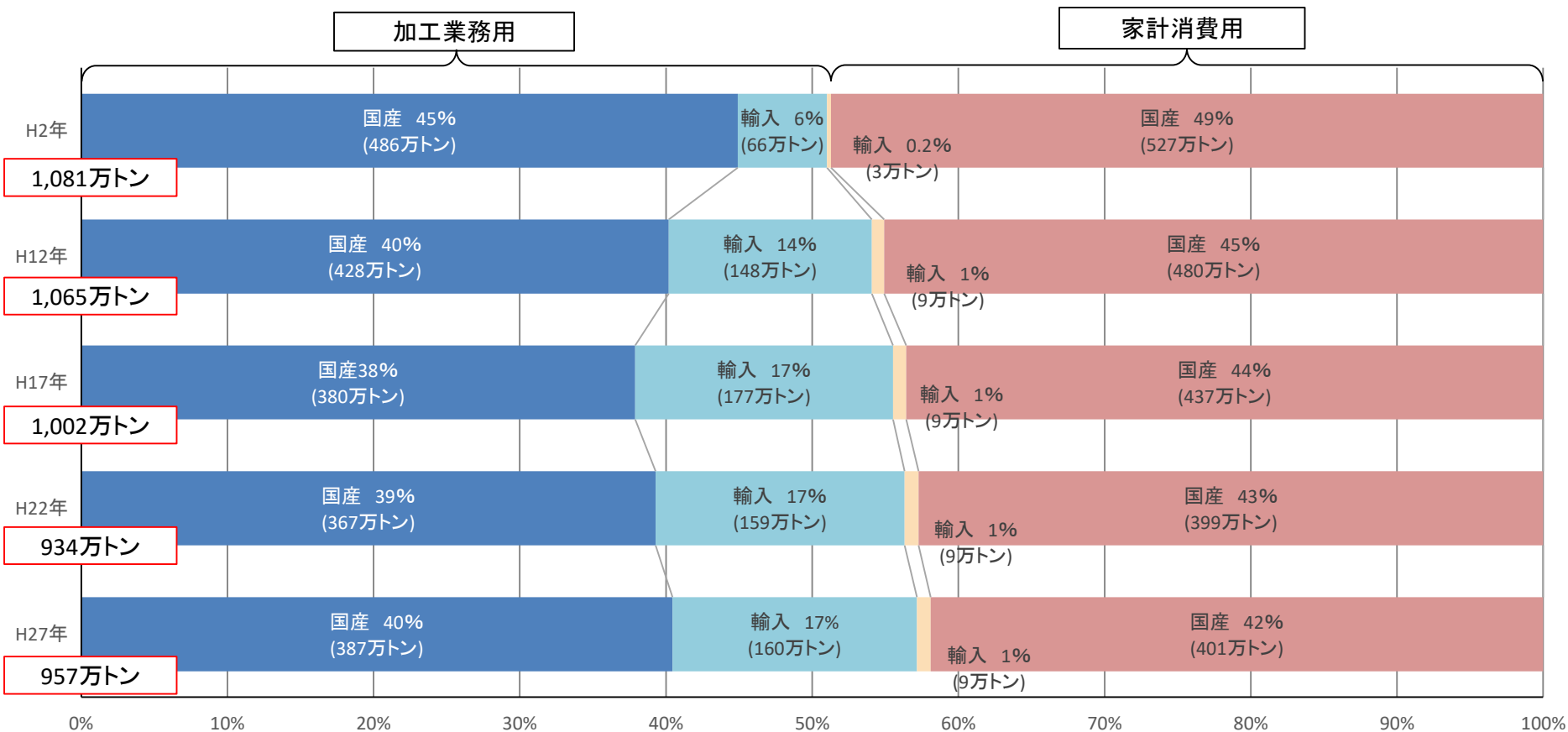
注: 主要品目として指定野菜(13品目)を用いて試算

(キャベツ、きゅうり、さといも、だいこん、トマト、なす、にんじん、ねぎ、はくさい、ピーマン、レタス、たまねぎ、ほうれんそう(ばれいしょ除く))

9. 国産および輸入野菜の用途別仕向け量の推移

- 加工・業務用野菜は食の外部化等を背景に増加傾向で推移し、直近では全体の6割程度。
- 平成以後は、当初は円高・デフレ基調を背景に輸入が急増したが、平成17年頃からはほぼ横ばいで推移。

○ 加工・業務用及び家計消費用の国産・輸入割合の推移(主要野菜品目)

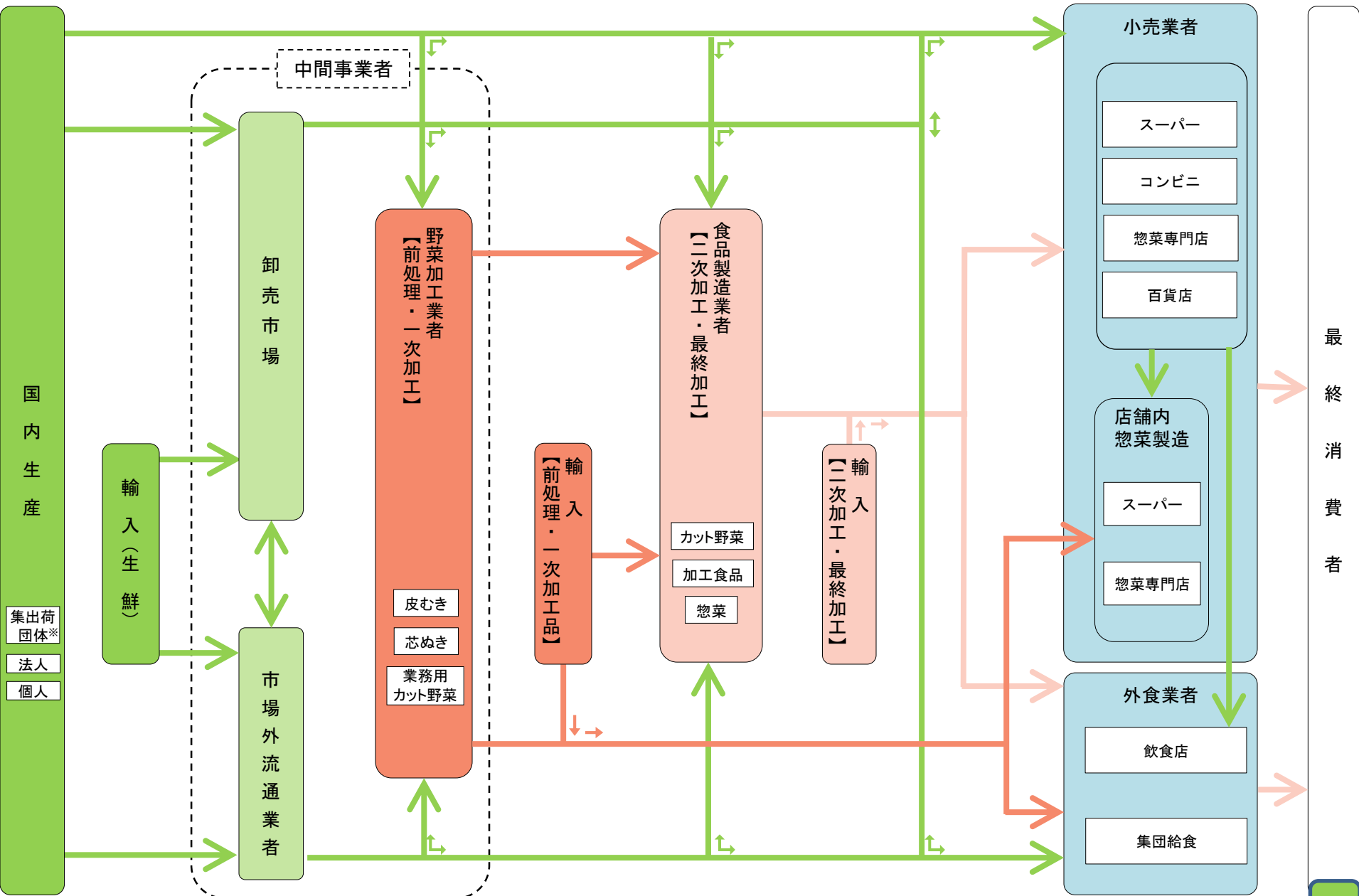


資料：農林水産政策研究所。指定野菜(ばれいしよを除く13品目)を用いて試算(キャベツ、きゅうり、さといも、だいこん、トマト、なす、にんじん、ねぎ、はくさい、ピーマン、レタス、たまねぎ、ほうれんそう)

注：平成19年12月から平成20年初めにかけて発生した輸入食品による薬物中毒事案などの影響により、野菜の輸入量は平成18年から平成22年まで低下傾向で推移。また、平成22年は、春先の低温・長雨、夏の記録的な猛暑・台風、年末から翌年にかけての豪雪等の影響により国内生産量が平年よりも大幅に減少。

参考：加工・業務用野菜の流通構造

→ ホール → 前処理・一次加工品 → 二次・最終加工品



※集出荷団体(農協、全農県本部、経済連、園芸連等)には、中間事業者の機能を有するものが存在する。